

ここがロドスだ、ここで跳べ——六〇年安保
アンソロジー、守田典彦氏とのこと

桂 木 健 次

一九六〇年秋口、三池闘争への支援（兵站部）動員から九大に戻って来たわたしは、安保闘争組織のため留年していた原野利彦（教育学部）君と期末（進学）試験を終えて自治会室に座っていた。教養部長田中定（農政経済）さんが間もなくやってきて、原野とわたしの進学は決まった、留年二年目の二宮章一（法学部）が受験していない、このままだと除籍になるという。その二宮氏が程なく現れて、わたしと自治会室前の近藤売店のおぼさんの二人して「追試の追試」を受けてくれと説得に当たったが、彼は「十年後の恐慌期の革命に備えてブントの再建に当たる、それに賭ける」と言って学園を去り、程なく革命的共産主義同盟の中心を担うことになるが、わたしたち二人の追い出し懇親会が事務長室で執り行われる。それからのわたしは、創生期の全国大学生協連合会の学生常任理事として上京することになった。川本光治さんがその任に堪えない体調というので急遽指名されたのである。

上京してみても滞在の宿がなく、最初の方は東大駒場の大部屋に潜り込んだが、当時自治労本部書記で出てきた田中義孝さん（九大学院法科大学院政治学科を修士修了間もない）の板橋の間借りに転がり込んだ。わたしの上京はそれから一年、二ヶ月に一度数日のペースで続いた。本学（法学部政治学科）に進学していたが、まじめに出席していた授業は具島兼三郎演習と竹原さんの政治思想史ぐらいだろうか、後は摘まみ受

講、よくも単位を揃えていったのだが、どうしても十単位足りなく、県庁上級職拝命にならないというので、卒論を書くことにした。

そのテーマは、「欧州（フランス・イタリア）におけるグラムシ社会ヘゲモニー革命論への批判的考察」のようなもので、教授昇任間もおない嶋崎譲さんが主査になったが、当時構造改良論として日本にも導入され、共産党内論争になってきた際物がテーマなので、社会党社会主義協会系の彼は、その論文の審査を竹原先生（副査）に丸投げした。なぜ、そうした題目にしたかという点、大学生協本部（常任理事会）でも論を分かつていて、六十年以前に党を離れていたブント系の常任理事のわたしは、共産党主流系の田中専務たちと一緒に格好で、東大組織部にいた飯尾要氏達の構造改良派と論争していた。六一年初夏には、生協連の全国政治集会がもたれ、共産党主流とブント（これはもうばらばらになっていたが、関西からの南（京大生協）、佐藤（同志社）とは脈が合っていて、わたしから「幻想を排して現実課題を」をレポートしたが、構造改良派の言う社会ヘゲモニー革命という論点は頭にこびりついた。

その九大を中心に、多くのブント員は、私ら世代に一回り年長の、久留米にあった第二分校時代の学生運動家のひと、守田典彦（青山到）の許で黒田寛一率いる革命的共産主義者同盟へ移るという選択肢がだされていて、それに同行出来ない私らは、学園誌（展望）並びに社会科学研究会サークル活動に関わってきたひとたちとの「マルクス主義研究会」を月一のペースで三畏閣などで進めていた。その研究会メンバーの年長であった木原義法氏は、守田氏や教養部講師のK氏たちと一九五七年の共産党内フラクションにかかわった政治学大学院の田中義孝氏との交流を深めていた。当時のわたしも上京のたびに田中氏の下宿に居候をしていて、当時の論争の埒場となっていた雰囲気に関わる機会もあり、居



守田典彦氏

酒屋したり、大島渚の「日本の夜と霧」の劇場こけら落としに加わったりだった。そうして、私が全国生協連の任がおわる頃、三池労組青年部との合意のもとに、社会主義青年同盟福岡地方本部の創立となったのである。そこで、私も生き方を決めて、福岡県庁への道を選んだ。

話は飛ぶが、守田典彦著「革命の革命」が著作選集刊行委員会編で刊行された。二〇一一年七月のことである。明治学院大学（駿河台校舎）でその講評会は、早稲田大学の旧ブントの面々が主宰して持たれた。それへのコメントを九大の旧ブントとして、ブント解体した一九六一年当時には守田氏に従って革命的共産同へ同行した篠原浩一郎氏からと、それ以外に、離れた私からも発言することになった。離れたとは言いがながら、私はその後も半世紀、よくお会いして話してきていた。私の従った田中義孝氏（自治労本部書記）と守田氏とは、一九五七年にほか数名と共産党からの分立を協議しあつてからの、選択した道は違えても、切っても切れない仲であり続けた。二人の関係は、私たちの世代に受け継がれてきた。そのときの私のコメントにもそうした九大におけるつながりのことを申し上げている。そして翌

年、守田氏が逝って偲ぶ会を持たれることになった。そこには、彼の晩年の私生活近辺を見続けていた森荃夫氏（私と党派を同じくした。彼もその後逝った）、守田氏に従つてその後二つに割れたうちの中核系の高木徹氏、その会を篠原氏が取り持った。その最後を九大人が、守田氏の母校鹿児島県の七高寮歌でめめた。在

京の旧ブントの主だった皆は行く歳月を顧みての合唱だった。守田氏の最後の最後に付き合ってくれた在京の佐藤静雄、蔵田計成両氏ほかには深くお礼を申し上げ、遺骨は佐賀県基山から駆け付けて見えられたご遺族に渡された。

ところで、私たちブントの「ポスト60」を割ったのは何だったか。当時、梯明秀が読まれた。そこで論じられている「自己の自覚（認識）」と言われたことで、西田哲学に及んで議論された。黒田寛一が持ち込んだ論点であった。プロレタリアが自己を自覚すること、それは「ものを作る」という「働くこと」によって自覚するということで、「自己から自己を見る」のではなく、「社会から自己を見る」というような自覚ということになる、と私たちは考えていった。学生である、研究の机上からでなく、どこまでわたしたちはその「社会」に関わるのか。黒田寛一

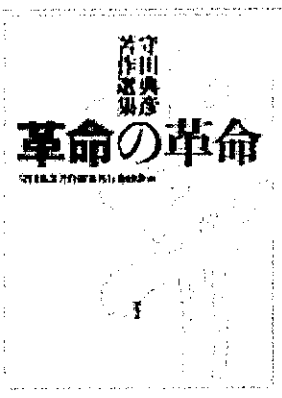
●守田典彦（青山 到）

1929～2011年（享年82歳）

- 1949年 九州大学入学
- 1950年 日本反戦学生同盟結成（九州大学）
- 1958年 共産主義者同盟加盟
- 1961年 革共同全国委加盟
- 1963年 革共同全国委脱退



『革命の革命』
（三浦悠司）1976年



『革命の革命 守田典彦著作集』（彰流社）2010年

が九大にやってくるという日、マルクス主義研究会は、そうした質問状を持って会場に入ったが、そこには議論を交える雰囲気はなく、四十名はその法文経の階段教室を退場することになった。このテーマは、その後十年に近い住まいを近くした二宮章一さんとの行き来する議論として繋がれていた。

また当時、わたしたちは「ひとり」になって、その一人同士がつながるような場を持っていかと言ってきたひとがいた。クロハタを掲げて六〇年安保の学生デモの後ろを歩き通していた副島辰巳という博多人形師であった。そこで、木原義法氏とその庵（雲月堂）を西新町に訪ねた。そこには、六十年を九州ブントの先頭に闘った八丁和男氏（在日の学生）、文学部でバルト神学者滝沢克己先生のもとに西田哲学を学んでいた末次氏、経済学部資料室司書の河野信子氏、そして「工作者宣言」を書き上げていた筑豊サークル村運動の谷川雁氏が師匠を囲んで座っていた。安保の最中、私が深く付き合わせていただいた「追われゆく坑夫たち」の上野英信の姿はなかった。この研究会は数回持たれたが、「ひとり」同士におわった。

その後、わたしはマルクス主義研究会の主だったメンバーの木原・古川・森（東）・森（荻）とは、当時争議中の西日本新聞社労組、三池労組、そして三池から解雇されて総評単組の書記に身を移していた元坑夫たち、当時大学院に進んでいた原田（統）・田島（司）たちとの話を進めて、社会党傘下の社会主義青年同盟に参加の方向でまとまった、「社会参加」という場の立場に立とう、ということになった。

社青同（福岡地本派）は、六八年のエンブラ佐世保と山田弾薬庫封鎖闘争にはじまる七一年に至るベトナム反戦のなかで福岡反戦青年労働者運動の中心となっていた。六三年十一月の県南筑福祉事務所（柳川）



2010年11月3日 守田典彦氏を囲む会

主事の時の主管の三井三池炭じん爆発事故（大牟田）で体調を崩したわたしは、福岡地本情勢研究所を預かる一方、それに到る数年を療養を兼ねて九州経済調査協会（シンクタンク）での非常勤、大学院に戻ってきた矢先の米軍機（ファントム）の墜落であった。大学院自治会のメンバーでは九大反戦委員会を結成の流れとなった。そのことは堀内隆治さんが筆を執られるだろうから措いて、当時の社会主義協会とのことを書き残しておきたい。協会が奥田八二さん（当時九大学生部長）の太田派と川口武彦さん（教養部教授）を中心とする向坂逸郎先生のグループとに、社会党・総評内部でも割れて、奥田・川口両トップの最後の会談の時、私は森東洋彦氏（地本）と向坂派の近江谷左馬之介宅にいた。六〇年ブントの時の守田氏と並んで九州の指導的立場にあった大坪氏と日本国籍

に帰化していた八丁氏は、太田派として、後の福岡県知事を拝命した奥田さんのブレーンを社会問題研究所シンクタンクから勤めることになる。

社青同福岡地本の組織は、社会主義協会の両派、反戦青年運動を担っていた組合青年部及び学生の村岡五十次さんのノンポリのほかに、六八年頃から学生同盟員の中に解放派が大きくなくて

いて、地本（桐井氏・織田氏・秋田氏）と福岡支部（上村氏）の主導に負えなくなっていた。また、向坂先生のソ連共産主義への傾きが大きくなっていたこともあって、間も立たないで社青同福岡地本派は解散することになった。地本専従の多くは中央自治労ほかの労組本部書記、家業、ノンポリ学生のグループとともに北九州工業群に入っていたほか、大学院へ進学していった。地本は、大牟田の三池労組同盟員をはじめとした向坂系に禪譲となり、三池労組書記に入った大津留宏氏が委員長となった。ひとつの歴史は終わって、わたしは経済学部大学院自治会の制度改革を掲げた助手を拝命した。然れど、臍を噛む思いは残る。

全国大学生協連で東京が多かったときに、ひとつのことは忘れられない。それは、中央常任理事会で一角を占めていた共産党内分派の構造改良派とのことである。任期途中から北陸の富山大学生協の加盟申請が上がってきた。その初代専務理事の人（専攻生）から渡されたいくつかのペーパーがあつて、その大学にグラムシの研究者がいることが分かった。当時の富山大学をリードしていた新進の内田穰吉・大谷ご両人はじめ「イタリア共産党トリアッチ、グラムシ」をよくやっていることを知った。しかし、生協運動にかかわっている飯尾要氏たちは「利潤分配論」から「生協利潤」を「民主的利潤」ということをしきりに主張、当時なお全国の単組という単組の大半が「赤字」、大学の厚生からの手当てで経営が回っている「現実」をどうするのかで、鋭く対立していた。それは措いて、ヘゲモニー革命論というのは、六〇年ブントがイメージとして引き摺っていた「戦艦ポチョムキン」蜂起のそれではない。その内田が十年後の大学紛争のきっかけになった教授会内紛で追われた後の一九七七年に、わたしがその大学に教官として奉職になろうということとは夢思わなかった。わたしが九大の卒業論文にかいたことは、そうし

たことを抑えて「批判」としてまとめたのだが、その稿に目通した田中義孝さんは「構造改革に靡いている」と手厳しかった。